(1)宮中將二　(2)竹下大將
(3)角海相大　(4)林大將
(5)荒木大將　(6)著者

「讀賣新聞社」寫眞部撮影
八月二十三日同紙夕刊掲載

中佐の相貌

著 をゝしまひろし

定價拾錢

内務省
昭和10.9.
第　號
NO.
30790
複寫禁止
122

函 安事
號 1227
永久保存

Ōshima, Hiroshi

をゝしま・ひろし著

永田事件の眞相

發行 時事研究會

DS885
.5
.N265Q85
1936
Asian
Japan
Case

98-840517

永田事件の眞相

をゝしまひろし

最近の陸軍

どうぢや、最近陸軍の有様は?。○○○○○○○の例に洩れず、滿洲事變以來急激に凡ゆる部門を○○し來つた陸軍が、いま、どうぢやらうか。『肅軍』などゝ一體なんと言ふ事○されたから、肅軍の字が忽然と陸軍の上に見舞ひ來つたのではあるまい。滿洲事變以來、ことある毎に○○○○○○○○○○○○○れた陸軍が、何時の日にかは味はなけ

れば國民○○の一句ぢやつた。健正なる××であれば、事新らしう今日『肅軍』が要望されはしまい。肅軍されなければならぬ禍根があればこそ、肅軍が叫ばれるのぢや。政黨の非を叫いて、政黨などゝ言ふものは此の世の不必要物ぢやと言はぬばかりに政黨惡を○○した○○がたつた二三年の間に、變れば變るものぢや、自ら○○の太鼓を叩いて、やれ師團長會議でござれやれ○○○○○でござれと、ハハハハ……

これぢやとて、元を正せば、陸軍自らが陸軍本來の○○を○れて、徒に○るを知つたからぢや軍人は軍人らしう、軍部は軍部らしう○○するところに、なんぞ一點の非難が起らう。○○○ぢやと言へば、○○○○○○○○、○○○○○外務省そこ除けで嘴を容れる。○○○○ぢや言へば內務省はあるのか無いのか判らん。一體政治は總理大臣がやつとるのか○○○○がやつとるのか判らん。理窟から言ふても道理から言ふても政治は總理大臣がやつてるなければならぬ筈ぢや。にも拘はらず事實は○○○○○○○○、○○○○○○○○○、これとは全く緣遠い。だが世の中には馬鹿と言ふことがある、芝居の馬は鳴きかたが下手ぢや、飛んでも二間も三間もは飛ばない。あれと同じで一時の勢に押しあげられて○○○○を握つた陸軍も、結局この類に歸せざ

るを得なかつた。馬脚が現はれなければ幸だつたらうが、○○○

今言ふたやうに、單に言論の自由、行政上の拘束を受けるのみならず、更に此の上に○○○○○○○が加重し來り○○○○○○○○○○。○○○○○○○、それが滿洲事變が生んだ○○であると言ふのならば、滿洲事變こそ、わが日本國民の自由と○○○○○○○した○○○○○○○○○○であると言はねばなるまい。のう、そうぢやないか。

更にその言論が法律の範圍内なるものか否かの吟味である檢閲についても、實に○○○○○○○○○○○○言論に對する取締は内務大臣がこれを行ふとる。新聞雜誌に對する檢閲は、また内務大臣下の警保局圖書課に依つて行はれとる筈ぢや。しかるに、奇怪千萬なることは、禁止若くは差止となるものゝ多くが○○○○○○○○○○○○

し、その眞實の社會に傳つて〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇に對して極度の不當な斷壓を下したのぢやと言はれても致しかたがあるまい。

一體、今日まで〇〇〇〇〇〇して來た警官の手から〇〇〇〇〇〇〇するなどゝ言ふことは、決して冷靜な人間の遣り口とは言はれん。急造りの家は風が吹いて倒れるさ。外に出でゝ〇〇を逞しふした〇〇が、一歩退き部内に到つて幾多の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇と暗流を抱いて驕る平家の〇〇を茲に〇〇〇〇〇〇〇〇。

〇〇が一人辭めたぐらいで、〇〇〇〇が一人轉つたぐらいで、數多きわが××の禍根が掃はれるものか。掃はれると思つたら、それこそ盲人の象いじりぢや。誤たんとした××——そうだらう——肅軍されなければならぬ××こそ行く途を誤ち、誤たんとしてゐるのではないか。その陸軍を皇軍創設の本來に歸らしめんとしたならば、全將士出でゝは過去の專横を轍まず、退いては私利私慾を離れ、眞に皇軍建設の本意を新たにしなければならぬ。われ〳〵が茲に忌憚のない意見を述べるのは、わが陸軍を想へばこそぢや。面白うないことを言へば嫌はれ、喋れば憎くまれるそれを覺悟で——これだけのことを言ふ吾輩の眞意が、一日も早う陸軍の全將士に判つて貰ひた

いものぢや。

醸成された？的雰圍氣

郷黨主義から人材主義へ

遲く共來る通常議會までには政黨の分解離合が行はれるだらうて？……。サア、それまでに政黨の離合集散があるかどうか、あるやうな形勢と素質は充分に認められやうが、しかし、どうなるか、未來の問題ぢや、秋到つて見なければ判るまい。レールを走る汽車でさへ脫線する世の例へ、軌條を走らぬこと多き政黨が、その未來に如何なる話題を提供するか、天勝以上の魔術ぢやよ。吾輩がこの間西下した車中で○謀○部の或る將○に遇ふたが、そのときにもそんな事を言ふとつた。なんでそんな事が判るかと尋ねたら、政友會でも民政黨でも、小は國民同盟に至るまで內紛擾然としてると應へたので、吾輩は一喝してやつたよ。

『お前たちに政黨のことが言へた義理か』

とな。胸に手を當てゝよーく考へて見ろ、政黨がいくら內輪もめをしたからと言ふて、負けた方

が出て行くまでぢや、その政黨と袂を別つまでぢや。ところが、××の內輪もめと來たら、少し性質が良くない。そら反對○ぢや！と言ふと○○○

海軍にもそうだが、陸軍でも主義の相違とか、見解の相違とか言ふものはある。そうぢやないか、一枚の紙にすら裏表がある。一本の道路にさへ右と左があるではないか。神ならず、佛ならざる身の陸軍々人であり海軍々人ぢや。同じやうな考へ許りを有つとる者許りとは行かぬ。同じやうな思想許りを有つとるとは行かぬ。

× × ×

往年、海軍で、あの著名なロンドン軍縮會議を中心に、國家を安泰の地に置くことを希ふがため、是に賛するものと、是を諒とせざるもの〻兩論が相○○した事實があつた。餘りにも著名な事實ではなかつたか。これなども、世人は海軍○?の抗爭と言ひ、一を○○?と呼び、他を○○?とさへ呼んでゐるが、事實は立派な主義と思想の懸隔ぢやつた。

即ち、一九三〇年わが昭和五年のことだつた。ときは濱口雄幸内閣、ロンドンの檜舞臺に、わが使命を帶して赴いたるものは、全權に前首相たりし若槻禮次郎、ときの海軍大臣財部彪大將と駐英大使松平恒雄の錚々たる人物ぢやつた喃。その他、海軍專門委員に部内隨一の軍政通左近司政三中將なども加へてゐた。處は佳し英京ロンドン、時は花咲く晩春四月、列强が世界の視聽を

集めつゝ互に鎬を削り、智を練り秘策を回らしたが、しかし、遂に日米、日英間の豫備交渉は英米側の卑劣な敬遠策のため、奏効なきまゝに、會議は本會議を迎へたのぢや。

本會議に於て、わが國は、

（一）八吋大巡の對米七割。

（二）潜水艦は現有勢力七萬八千五百噸を保有。

（三）以上の二つを含む補助艦の總括的對米七割。

の三原則を大上段に振りかざしながら、攻防宜しきを得、虚々術を繰つたが、既にしてその八年の昔、ワシントン條約に於いて對米六割の比率を容認した日本ぢや故に、極度に不利なる立場に置かれてしまふた。

『ワシントン條約締結當時と國際情勢の尚變らぬ今日、日本の主張する比率變更は奇怪ぢやァないか、六割比率と太平洋防備は相對的なものぢや』

の反駁の前に、われは退いて會議決裂の責と世界〇〇〇〇の不當なる罪を得るか、不滿を忍んでも妥協の途を講ずるか、焦慮頻りにして、出づるも退くも道は唯これ難嶮と言ふ危地に逢着した

日本政界の玉璧若槻禮次郎あり、日本海軍の偉材財部彪ありと雖も戰は空しふして利なく、暗雲すでに襲ふを知らねばならなかつた。

わが對米六割の最後案が若槻全權から政府に請訓されると、政府はときの濱口首相を中心に臨時閣議を開き、直ちに請訓案の採否を討議したものだつた。席上、幣原(喜重郎)外務大臣は多少の犧牲を忍ぶも、この際小利を捨てゝ請訓案に同意し、世界平和を希求すべき旨を極力主張し海軍省側の一部また已むなしとしたが、加藤寛治大將を軍令部長とする軍令部は極力「絶對反對」の意向を堅持し、請訓案に對して囂々の批難を浴びせかけた事實は、或は尚耳あたらしき一事ぢやらう。

だが、何時の世にも大勢に抗する事は出來ん。水を上る鯉はあつても、上る木の葉のなき例ぢや。回訓は發せられ條約は締結された。その結果わが掲げた最初の三原則は、

(一) 八吋大巡對米六割に削減(一割減)。

(二) 日米同率の五萬二千七百噸を保有(二萬五千八百噸減)。

(三) 容認。

の結果を齎らした。

この時からかも知れん。海軍に二つの〇〇が生れたのは喃。實際言ふと、ロンドン會議は御批准を仰いで締結されたのぢや。それを後になつて、良くないなどゝ畏れ多くて言へぬ筈ぢや。それを平氣で〇〇〇とやらが言ひ出した。そこに不祥なる海軍の〇〇〇が生れる原因が〇〇られたのぢや。いや、いま暫くの昔、大正九年開かれたワシントン會議に、遠くその禍根が遺されてゐたのかも知れん。けれども、それが不幸にも、出でゝ表面の問題となつたのは、なんと言つても此のロンドン會議以來の事ぢや。ロンドン條約を〇とすべきものと、〇とすべきものが、互に相〇〇し、殊に自派案の容認されなかつた×令系統の〇〇〇と、×政系統の〇〇〇との間に消し能はざる〇が生じ、こと起る度び毎に〇〇〇は〇〇〇の〇〇を痛罵し、禍根は更に深く〇〇〇

○○○○○○○○○。そして、徐々城塞を築いた○○○○は、更に○○○○○○○海軍大臣を自らの掌中に○○○○、○○○○○○○○○

「ナニ、陸軍の奴輩は田舎百姓でござんすから、いや、なんにも判らんでござる。」

と、昂然海軍のためにを氣吐くと、陸軍は陸軍で、

「バタ臭いのは眞ツ平ぢや。陸軍の腕には大和の筋がねが入つとる。」

と、智を求め技を尋ねて海外へ雄飛する海軍を尻目に豪毅を守り果斷を護り、わが武士道を守備せんとしたものだつた喃。この對立は近く濱口内閣の陸相宇垣と海相財部の間にも見受けられたが、東北の人間も出れば、關東からも人材が輩出すると言ふ具合に、何時迄も太陽は中天にばかりはなかつた。けれど、一禍去つてまた一禍ぢや、人材の按分が企てられやうとした陸軍(海軍)に、長州人(薩摩人)に依つて獨占された過去の〇〇に對する反感が擡頭しはじめた。凡ゆる者の頭の中に鄕黨の大を望まぬものがあらうか、長州人に依つて獨占された往時の權勢を、わが手中に得んものと、凡ゆる鄕黨が起つたのぢや。備前も起てば、駿河も立ちと言ふ風にな。その結果現はれたものゝ中で、世に言ふ「佐賀閥」、「土佐閥」などは、世評に出づべく最も大なるものゝ一だつた喃。

そう斯うしてゐる間に、陸軍の所謂、鄕黨?は、やがて人材?に變つた。たまたま宇垣が出で

〉大臣たれば、○○?は旺盛となり、退いて荒木大臣たればまた○○?は壯大となる。

「それが、今日閥と言はれるものだらう……」と言ふのか。しかし、閥ではあるまい。尠く共前にも述べたやうに、苟も陛下の統帥したまふ皇軍に私黨私閥の存在が許されるべきものではあるまい。見方は十人十色ぢや。人間の見ることぢやで、仲には閥だと言ふ御仁もあるかも判らん。見方に依れば閥とも見へやう、ハハハハ……。見方は、見る人の勝手ぢやで喃。

神聖なるべき皇軍内に斯の如く、私黨私閥の存在が許されるか、例へ立黨立閥の擧なしとしても、輿論をして立黨立閥的雰圍氣のあるを想はしめたことに對して全陸軍將士は、果して國民の前に如何にして謝すべき乎。陸軍全將士にして一言も無い筈ぢや、ハハハ……。

宇垣・荒木・林?はないが

宇垣・荒木・林×はある

『では、人材?の解剖をやれ』と言ふのか。ハハハ……。なに?『例へば守垣?とか、荒木?だか、林?だとか言ふ具合に……』喋れと言ふのか?。いや、それはいかん。前にも繰り返した

やうに苟くも皇軍内に？的雰圍氣の存在が許されるべき性質のものではない。故に、そんな雰圍氣が、假りにも皇軍内にあるとは想ひたくもない。また誤つて、そんな雰圍氣を釀成してゐるものであつても、それを呼んで？と言ひたうない。だから「宇垣？」もなければ「荒木？」もない筈ぢや。？ではなうて、第一派などと言ふものもあるべきではない筈ぢや。だが、「宇垣×」とか「荒木×」と言ふものは、無いとは言へん。古來から、先哲を慕ふて後輩の集い來るを美風とされてゐる東西の習慣ぢや。宇垣が偉いからと言ふて、それに感化されて後輩が集るは當然であり、又荒木學ぶべしとして後輩が師風の薫化を受けんとするのも何等批難に値しないぢやらう。だから斯う言ふ意味で、「宇垣○」や「荒木○」さては「林○」などゝ言ふものはないが、「宇垣×」「荒木×」「林×」と言ふものは無いとは言へぬ。

閥と言ふものは、その頭に立つ人間が。凡ゆる意味で良うなつても惡うなつても、常にその周圍にある、丁度家族のやうなものぢやが、宗はその師表となるものゝ德風や智風を慕ふて寄る集合だけに、惡うなると寄りつかぬ。それが宗ぢや。今日、○などゝ言はれてゐるのは、この宗に外ならぬ。宇垣は偉いと言ふてその傘下に集り、荒木は偉いと言ふてその麾下に群る。宇垣を崇

拜し、荒木を崇拜するが故に外ならぬのぢや。では「×」にはどんなものがあるかつて？……。まづ「宗垣×」それから、「荒木×」、「林×」、こんなものぢや喃。なに？眞崎×がないかつて……うむ、眞崎も偉い奴ぢや、信仰されとる。しかし、眞崎と荒木とは〇〇×ぢや。荒木×が即ち眞崎宗ぢや。ここでは、これを荒木〇の中へ含めておかう。

しかし、今日までその〇〇〇が餘りにも〇〇して、ときどき眼を背けなければならぬやうな事も起りはした、時に〇〇が〇〇大臣となれば△△の崇拜者の〇〇を策し、△△が〇〇大臣となれば〇〇たちの崇拜者たちの〇〇を企てたこともないとは言はれぬ。昨年三月、十二期のトップを切つた陸軍の智嚢二宮治重中將が、〇〇を〇〇するが故に、眞〇〇將などの中傷？のため〇前陸〇に依つて〇ツサリ〇られたと言ふ事實がある。二宮は陸軍切つての智者ぢやつた。歩兵第二旅團長から參謀本部總務部長に上り、更に參謀次長と智材なるが故に、トン〳〵出世した男ぢやつた。それが、宇垣の交代期と共に第五師團（廣島）長に遷され、とう〳〵現役を退かしめられたと言ふやうな事實もある。また立場は異ふが近くは今年八月第二師團長から沈沒した秦眞次中將もその例ぢや。秦は福岡縣の出身で、第三師團參謀長、東京警備參謀長、關東軍司令部附、歩兵第

十五旅團（高田）長、關東軍司令部附、第九師團司令部附、第十四師團司令部附、東京灣要塞司令官となつたが、東京灣要塞司令官になると、大抵前途は沈沒すると相場が定つとる。此處をうまく逃れて、出世したものは、近頃では前陸相の林大將ぐらいなものぢやらう。その點から言へば彼は餘つ程運の好い男ぢやらう。間もなく著名な滿洲事變が起ると、彼は陸軍省に來つて宣傳係となり、彼一流の手腕を以て喝采を博し、その功を認められて憲兵司令官の重職にヂヤンプした荒木、眞崎大將の○○には双肌ぬいで○○し、一時、言論○○時代が現出されたと言はれるほど無冠の帝王を以て許された言論界が○○○

そうぢや喃。先づ朝鮮に行つて、近來にない名總督ぢやと言はれてゐる宇垣一成を擧げんければなるまい。

宇垣と宇垣を崇拜する人々

宇垣は、明治元年岡山縣に生れた。始めは軍人などにならうとは夢にも想はなかつたそうぢや生家にほど近い大内村の代用教員として、彼は永らくの間教壇に立つてゐた。その儘先生さまで彼が生を了へてゐたならば、宇垣は案外平和な生活で、校長ぐらい迄には上つて、いま頃はもう餘世を鄕村のために送つてゐたかも知れなかつた。それが十九の歳を迎へると、どうやら實社會が眼に映りはじめたのぢや喃。彼は、空しく志望を抱いて故山に枯れる氣にもなれなかつたのぢやらう、所謂笈を負ふて上京し、翌年士官候補生として歩兵第一聯隊に入隊した。明治二十四年始めて少尉に任ぜられたが、この頃彼は田舍丸出しの鈍さが友人間に傳つて、

「ドン垣！」

「ドン垣！」

とニツク・ネームを奉られてゐたものぢやが、その心情は期せずして、將來に大をなさんと心秘かに希ふところがあり、故郷に愛兒の成功を祈りながら靜かに田園に鍬を握つてゐる父君に、

「一番偉い軍人に成つてお目に掛けます。」

事のついでに書き足したと傳へられてゐる。その頃から幼名の杢さんは、一成に換つたそうぢや。

爾來累進して第一師團參謀、韓國駐劄參謀からドイツに留學し、教育總監部第一課長に陞んだのが明治四十二年だつた。その時の軍務局長が「オラが首相」で有名だつた田中義一で、大臣が上原勇作と言ふ錚々どころだつたが、その後天下の視聽を集めた二ケ師團增設問題が起り、彼は

とう〳〵西園寺に代つて山本(權兵衛)內閣が組織されると田中義一は第一師團長になり、上原の跡を襲ふて木越が陸相となつた。この時權兵衛總理が、陸軍大臣の任用令を豫備役にまで延長しやうと言ふ改革案を作つたのぢや。そして、木越陸相に命じて、宇垣の印を捺させやうとすると、宇垣は意氣鋭く、

「そんな馬鹿なことには、承知出來ん。」

大臣を叱り飛ばした。宇垣らしいぢやないか。流石温厚な木越も、これには驚いたそうぢや。こゝで當り前ならバツサリと言ふところぢやが、木越も田中に氣兼ねしたものと見え、死一等を減じて、名古屋の歩兵第六聯隊長に遷して、事なきを得た。

少將に進むと古巣の教育總監部に歸り咲き、大正七年の日支軍事協定には北京に乘り込んで對支外交の上に一大功績を遺し、更に田中義一の參謀長の許に、シベリア出兵の中心人物となつた中將に昇ると陸軍大學校長、第十師團(姫路)長となり、清浦内閣で福田大將を蹴つて中將の身で陸軍大臣を獲たと言ふ出世振りぢや。越へて加藤内閣にも陸相を再任したが、歴代の陸相が手を着け得やうとして得なかつた陸軍の大整理を敢行して、彼は絶大の賞讃を博し、その後若槻内閣にも陸相を勤め、大臣たること三度に及んだ。

今日、彼は惑星など一部では言はれてゐる。彼が餘りに光り過ぎるからぢや。先年も、荒木が陸相の頃、彼は荒木を官邸に訪ふたことがあつた。何を語つたか知らぬが、新聞では、

「どうも陸軍で宇垣○と荒木○が○○してゐる。それを緩和しやうとして、宇垣は荒木を訪ふ

た。ところが、その會見の結果、甚だ氣まづかつたものと見え、宇垣が玄關を去つて行くのを、荒木は送らなかつた。」

と傳へて居つた喃。何年も後輩の荒木の處へ、大臣だと思へばこそ訪れた宇垣であらうに、彼はこの不快に遭ふて、荒木との協和を○○○○○○○○○。（此の項筆者著大日本拓殖史四二九頁—四三〇頁拔萃）

ところで、宇垣を○○する人々の主なるものは、

陸軍大將（關東軍司令官特命全權大使關東長官議定官）南次郎。同（軍事參議官）阿部信行。陸軍中將（臺灣軍司令官）寺內壽一。同（陸軍技術本部長）岸本綾夫。同（參謀次長）杉山元。同（第十四師團長）畑俊六。同（教育總監部本部長）林桂。同（陸軍次官）古莊幹郎。同（第二師團長）梅津美治郎。同（○○○○○○○○）谷壽夫。同（憲兵司令官）岩佐祿郎。陸軍少將（參謀本部附）土肥原賢三などがゐるが、この他に故人となつた人物で、參謀總長をやつたことのある金谷範三と、いま渡米中の參謀次長をやつたことのある二宮治重がゐる。

荒木と荒木を崇拜する人々

宇垣とは似ても似つかぬ性格を有つとる荒木ぢや。ただ、宇垣と似たと言へば中將で大臣となつたと言ふ點だけぢや喃。

純情であり、正直であり、果敢なる性格を有つとる荒木ぢや。現在少壯士官の間の、荒木熱と言へば、眞崎熱と相並んでもの豪いものぢや。佐官級から尉官級にかけて、荒木のためならと言ふと、○でもと言ふほど彼は信仰の中心をなしとる。昨今はどうか知らんが、亡くなつた○○○中將なども、もとを正せば荒木に依つて○○されて來た人物ぢや。

『永田が、今夏の定期異動案作製の中心をなした』と云ふ噂があるが本當だらうか、と言ふのか、ハハハ……。人事は人事局長が中心となるべきものではないか。『橋本次官と今井人事局長(現軍務局長)の他に永田も是に參劃したと言ふ噂がある』て？ハハハ……。どうだか、仲々耳が長い喃。その○○○の發表の結果が、○○大將の下野、○木○○組の○○の待命、その外○○○○、○○○○○○○○○○○○○○故に永田は荒木に對しては足を向けて寢られ

もせぬ、それにも拘はらず、○○○○○の異動案に參劃し○○○○の下野、○の待命を○○した。○○は裏切つた○○○○○○○○○、それのみか、荒木と反對○の宇垣×が大分復活した、是等は○○永田の○○○○○○○○○

荒木についても、今日兎角の風評がある。しかし、あれは好い男ぢや。人間性のある、前にも言ふたやうに、純情な純眞な、そして理解のいゝ男ぢや。ときに、悪い取り捲きがあつて、いろんな噂もたてられた。遣りすぎたと言はれもしとる。だが、それは一途に荒木のみを責むべきではない。

荒木を〇〇する連中か……。

陸軍大將（侍從武官長）本庄繁。同（陸軍大臣）川島義之。陸軍中將（第六師團長）香椎浩平。同（第五師團長）小磯國昭。同（第十師團長）建川美次。同（參本附）橋本虎之助。同（第十一師團長）田代皖一郎。同（歩兵學校長）松浦淳六郎。陸軍少將（參謀本部第二部長）岡村寧次。同（〇〇〇〇隊司令官）大谷龜藏。同（關東軍參謀副長）板垣征四郎。同（第十二師團司令部附）東條英機。

の上に、更に眞崎甚三郎大將及び彼を崇拜する一統が合流するものと見られる喃、故に

陸軍大將（軍事參議官）眞崎甚三郎。陸軍中將（第一師團長）柳川平助。同（本省整備局長）山岡重厚。同（陸軍大學校長）小畑敏四郎。

の諸將があらう、それに物故組では、荒木〇の元帥武藤信義、第二師團長をやつた多門二郎中將

があり、豫備組には荒木系の緒方勝一大將（技術本部長）。松井石根大將（軍事參議官）の外に中將級では憲兵司令官から第二師團長に飛び、この異動で幾多の話題を殘して待命となつた秦眞次を筆頭に廣瀬壽助、阪本政右衛門、鎌田彌彦、原田敬一、瀨川章友、大谷一男、小野寺長治郎の各中將級がゐるが、嘗ては陸軍の異彩として、その春秋を讃へられつゝ果なくも不慮の死を遂げた○○○○中將が、奇しくも荒木○中に荒木、眞崎大將を崇拜する一人として○○してゐたことを忘れてはならん。これについては、既に述べたぢやで、重ねて繰り返す愚をせぬ。

林と林を崇拜する人々

林が、荒木に代つて陸軍大臣になるまでは恐らく彼は獨りぽつちだつた。殊更ら怨まれたり、容れられぬ人間ではなかつたが、と言ふて彼には殊更崇拜を受けるやうな取り卷き連中もなかつたそれが、一度陸軍大臣となると、どうぢや猛然たる急潮を以て、彼の周圍には彼を崇拜しやうとする人間が押しかけたものぢや。恐ろしいほどの勢ぢや、一體全體あの潮がどこから押し流れたかと思ふ程、それはもの豪い勢ぢやつた。押し寄せた勢の中心は、今日まで宇垣をも、荒木を

も崇拜の的としなかつた者が多かつたが、中には宇垣○の○中から、荒木○の○中から出でゝ是に大同する者も無い譯にはゆかなかつた。政權の來ぬ政友會を拔け出でゝ政權に近い新政黨に、魚の香を嗅いでゆく猫のやうに、あさましい連中もゐたさ。何時、何處の世にも變らぬ世狀ぢやで喃。去年の一月二十三日陸相となつてから、彼が永田事件の責任を負ふて辭表を捧呈する間、一體幾何の年月を經てゐたか、數ふるに一年と九ケ月に足りんぢやァないか。そのたつた一年と九ケ月に足りぬ間に、林を慕ふて集り來つたものが、どんなに多かつたか。中には宇垣や荒木に憤滿を有つて、その何れにも組することを否んでゐた連中が、忽然と彗星の如く現はれた林銑十郎の陸相登臺に、わが秋到れりと如何に欣喜し、如何に渴仰して是に赴いたか……、想像するに餘りあらう。とに角、林のもとには、雜然としてゐた中立○が雪崩○つたのぢや。

林はもとゝ、宇垣とは馬が合はなかつたが、荒木や眞崎とは惡くはなかつた。それがため、陸相就任第一回の昨年三月の定期異動の如きは、多分に荒木や眞崎の○○を參酌したぐらひだつた。だが、彼は陸軍大臣として、その使命の重大なることを自覺すると、翻然！生來の剛直、潔白、果敢な性格を自らの心の中から呼び戻し始めた。それはときに、半面に抱かれた正直、涙脆

い性狀のために、多少の牽制は免れなかつたが、今次の八月の異動の如きは、彼は遺憾なく剛直さと、潔白さと果敢さを示したと言はれとる。古來の友人である荒木や眞崎の期待を裏切つてまで、いや期待を裏切るどころではなく永年の交友をこの一時に叩き潰してまで、彼は日本陸軍の健正のために巨腕を揮ふたのぢや。しかし、彼の巨腕必ずしも絶好ではなかつた。打つたは打つたがヒットではなかつた。ネットの裏の方へものすごく打ち込まれたフアボールだつた。林の眼にも人の心を見る眼がなかつた。永田事件のやうな我が陸軍空前の大失態が惹起された。林はその責任を負ふて下野した。しかし、下野したからと言ふて、この空前の大不祥事は消え去らぬ。林が、武人らしう腹搔き切つても、不祥事は不祥事ぢや。たゞ林が、陸軍大臣とならなかつたならば、或は我が××の大不〇事は捲き起されずに濟んだかも知れぬ。想へば〇の陸相就任こそ、林のために最大の不幸を齎らしたが、それよりも先づ我が陸軍のために最大の不幸を齎らすものとなつたぞ。彼が朝鮮軍司令官のとき、滿洲事變起るや期に臨んで獨斷嘉村旅團に越境を命じて天晴武將の名を擧げた當時と想ひ較べて、その差異の如何に甚だしき、彼は軍略家ではあつたが軍政家ではなかつたのだらうか……。

生れは石川縣金澤ぢや。第八期の優秀組で、日露戰爭では乃木軍の第九師團隷下の歩兵大尉として出戰し、偉勳を樹て乃木大將から感狀を貰ふたと言ふ逸話がある。それから第三師團參謀を經て歩兵第五十七聯隊長、陸軍士官學校豫科長、教育總監部附、歩兵第二旅團長から東京灣要塞司令官に追ひ込まれたが、うまく此の危地を拔けて陸軍大學校長、教育總監部本部長、近衛師團長、朝鮮軍司令官、教育總監と無人の境を行くが如く馳驅しつゝけた。教育總監の頃から、彼の大臣說は動かなかつた。政變の起る度に、彼は後任陸相として押しも押されもせぬ地歩に在つたしかし、囑望された彼の大臣はいまも述べたやうに、とう〳〵彼に黑星を與へてしまつた。恐らく彼の不運が近く○○となつて、○○の報に代へられはしまいか喃。

林を○○する人々には、既に亡き數に入つた、

陸軍中將(前○○局長)○○○○

を首めとして、

陸軍大將(教育總監)渡邊錠太郎、陸軍中將(第九師團長)外山豊造、同(參謀本部附)蒲穆、同(同)井上忠也、同(第三師團長)岩越恒一、同(第二十師團長)三宅光治、同(第八師團長)中村孝太

郎、同（關東軍參謀長）西尾壽造、同（軍務局長）今井清、同（參謀本部總務部長）山田乙三

と言ふ顏ぶれぢや喃。

其他の人々

右顧もなければ左眄もないと言ふ連中は、大將では東京警備司令官兼東部防衛司令官の西義一と朝鮮軍司令官の植田謙吉ぐらいなものぢや。中將級では造兵廠長官の植村東彥、陸軍科學研究所長の久村種樹などぢやが、しかし、俺は此の組ぢや、吾等は彼の組ぢやと看板をぶら下げてゐる譯ではないし、人の腹の中の問題ぢや故に、多少は見込み違ひがあるかも知れぬ、しかし、黑が白になつたり、白が黑になるやうな事も、まあ、あるまいさ。

巷說に惑はされたか相澤中佐

「なにか、相澤中佐について知らんか」と言ふのか。何も知らん。相澤と言ふ名前も、今度の事件で始めて聞いたぢやで、どうして、どう言ふ理由で、今度のやうな事件を捲き起したか、凡

その想像はつくさ……、然し眞相とやらは知らん。

しかしぢや、氣の毒なことは氣の毒ぢや。殺つた表面にどう言ふ理由があつたかは、さて措いて、自分の再び起ち能はざることを識つて○○○

て○○○○○○○から嘴。唯に相澤が巷説とやらに○○○○○○○○、○○○○それは餘りにも相澤○○○○○○○○○○○○○、巷説だけで○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○、○○○○○○○○○○○○○。犬養首相も立派な國家の一お役ぢやつた。その犬養を殺した○○○○○○○○○○○○○○○○○か、國士扱ひをされ、同じ國家の一お役人を○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○相澤が○○○○哀れにも狂○扱ひをされる。ナニ！動機が違ふぢやらうて……。馬鹿な、彼も國家を憂ふるの至情ならば、我も亦わが陸軍てふ國家を憂ふるの○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。

勿論、永田（軍務局長）ぢやて、氣の毒ぢや、言ひやうもない。事件の惹起したとき居合せ、不慮の傷害を蒙つた○○○○隊長が、傷癒へて、

「自分と言ふ者が居合せながら、永田を殺さしめ、また相澤をも再び起ち能はざる身にしたことは漸愧に堪へん。病床に在りながらも、自分は二人の寫眞を飾つて、お詫しとつた」

と心境を洩したそうぢや。小生ぢやとて、全く同感ぢや。永田が陸軍の偉材なれば、相澤また陸軍の偉材だつたらう。問題は陸軍々法會議に於いて、詳かになるべきもので、いま茲に、どう斯

うと言ふことは謹むが、とに角惜しい事をした。ただ身を犠牲にして○○○

長い肩書を有つてゐた菱刈隆が、後を南次郎に讓り、軍事參議官の閑職から勇退したので、今では南次郎が筆頭大將ぢや。

元帥陸軍大將	參謀總長議定官 載仁親王
元帥陸軍大將	守正王
陸軍大將	南次郎
陸軍大將	關東軍司令官特命全權大使關東長官議定官
陸軍大將	教育總監 渡邊錠太郎
陸軍大將	軍事參議官 林銑十郎
陸軍大將	軍事參議官 眞崎甚三郎
陸軍大將	侍從武官長 本庄繁
陸軍大將	軍事參議官 阿部信行
陸軍大將	軍事參議官 荒木貞夫
陸軍大將	陸軍大臣兼對滿事務局總裁 川島義之
陸軍大將	東京警備司令官兼東部防衛司令官 西義一

陸軍大將

朝鮮軍司令官　植田謙吉

三四

『菱刈大將について語れつて？……』菱刈は面白い男ぢやつた喃。菱刈らしいエピソートが到る處、到る地に遺されてゐる。欣喜雀躍將軍などゝ、ニツク・ネームを附けられてゐることは餘りにも著名ぢやらう。臺灣軍司令官の榮轉の快報を握つて、彼は臺灣からの歡迎電報に對して、

「わしは欣喜雀躍しとる、急ぎ任地に赴むかん」

彼は斯う返電したんぢやつた喃。生れが鹿兒島だつた關係もあらうか、彼は陸軍の新西郷を以て許されてゐた。軍人は、たいてい豪放ぢや、磊落ぢやと言はれるものぢやが、菱刈のは一筋縄の豪放磊落ぢやアなかつた。日露戰爭のときも、彼奴は梅澤旅團の參謀として出征したが、たまたま沙河の大會戰の最中に、喉が乾いたと言ふ部下があつたので、彼は、

「そうか、喉が乾いたとは可愛そうぢや」

水筒を二つ三つ手に下げて彈雨の中を、たつた四五丁に近着いた敵前目がけて水を汲みに行つた

ものぢや。見てる方ぢや冷や冷やしてゐる。と彼は、溜の水を水筒に積め込むと、やにはに股を拓いて、

『ついでのことぢや、小便を足して行くか喃』

いやもう、彼の豪放や磊落は斯うまで悟道に入つてゐたものぢや。臺灣軍司令官になる前に、彼は第四師團長ぢやつたが、この時も、防空演習の皮切りをやつて、やんやの喝采を博したエピソートがある。明治四年十一月の生れぢやから、今年丁度六十五歳の停年だつた。歩兵少尉に任官したのが、明治二十七年九月で、この第五期生の中には、參謀總長として有名だつた故金谷範三などもゐたが、結局彼は第五期の最幸運兒として最終を飾つた。十年も前の、彼が戸山學校長から由良要塞司令官に左遷された不運なるその頃、彼が何時の日にか大將になるだらうと、何人が夢想したであらうか。盛者必滅のことはりあるとは言へ、彼の浮沈の甚だしきを、誰か驚かざるか喃。まア、菱刈といふ男は、いゝ男ぢやつた。部内蔵も味方もなかつた。眞中にたつた風來坊で喃。

『南大將とは？……』南も大分滿洲で活躍しとる喃。現役大將の中で、あとで語る阿部信行

と共に、宇垣を理解してゐる双璧ぢや。菱刈が滿洲から歸ると、彼はその後を襲ふたが　實を言ふと、南をとり捲いてゐる連中は、まさか南が滿洲へ行くぢやらうとは考へなんだ。陸軍大臣が勸めても、南は拒否するに違ひないと思ふてゐたんぢや。ところが、彼は、

『何も御奉公ぢや』

あつさり引き受けて滿洲へ飛んだ。啞然としたのは、とり捲き連中ぢやつた。

生れは大分縣ぢや、第六期の騎兵科出身で喃。あのデブ〳〵が騎兵だつたのさ、走るより轉ぶ方が多かつたらうと思ふが、仲々そうぢやない。若いときは、案外美靑年で喃、馬上の若武者は幾多のローマンスとやらを生んだものぢや。いま教育總監となつとる渡邊錠太郎と一緒に陸軍大學を卒業すると、間もなく日露の開戰となつて、彼は騎兵第一聯隊の中隊長として出征した。それから、大學校の兵學教官や關東都督府參謀などをやつたが、また元の騎馬武者の古巢に戻つて陸軍騎兵實施學校教官、騎兵第十三聯隊長、本省軍務局騎兵課長と馬畑に咲いた。その後、支那駐屯軍司令官、騎兵第三旅團長、陸軍騎兵學校長、騎兵官、第十六師團長、參謀次長、朝鮮軍司令官に昇り、昭和六年四月ときの濱口首相の兇變に遭ふや、總辭職した跡を襲ふて成立した若槻

第二次内閣に、彼は宇垣と代つて陸軍大臣になつた。この頃が、彼の頂上だつたらう喃。それから、親しむべき宇垣現役を退き、親しむべからざる荒木陸軍大臣となるに及んで、彼の不遇時代は深刻ぢやつた。默々と彼は憂悶の日を送つてゐたことぢやらう。泣かぬ螢は身を焦すとか、寡言なる南次郎、果して如何に鬱々たりしか喃。いまは滿洲の地に活躍しとる、對滿機構改革問題後の現地で華々しうやつとる、しかし、これぢやとて、彼が筆頭大將なるが故に、菱刈と同じの○り込みぢや。彼の下で働いてゐる多くの中には、彼と立場を○○○○○○、善いとは言へまい。若し彼が、永き晩年を、その陷中に落さなければ、幸ぢやと言へやう喃。豪磊なことでは人一倍な菱刈でさへ、あの對滿機構改革問題の紛糾前後○○○○○の渦中に右顧し左眄○○○○○○○○○○○○○○○○○、南次郎なるが故に、果して菱刈の轍を踏まずと、誰が斷言出來やうぞ……。

『渡邊大將とはどんな人物かつて？……』眞崎の退却した跡へ、林前陸相の推挽を得て重職教育總監となつたことは、つい此の間のことぢやつた喃。あれが、名を賣出したのは、臺灣軍の司令官のときぢや。彼の在任中たまゝ例の霧社蕃事件が惹起された。その善後處置が、どう

も下手だと、前の司令官の磊落親爺菱刈隆に批難された、すると、彼は、

『わしのやつた何の點が、まづいのぢや。』

憤然として、堂々聲明書を以て是に應酬し、中央部の問題となりかけた事があつたらう。平凡な人間らしいが、負けず嫌ひぢや。頭の好いので部内でも有名ぢやが、その割合に今日まで光らなかつた。渡邊と言へば霧社蕃事件を想ひ起すぐらいのもので、特徴らしいものが現はれなかつたのは、同期(第八期)の林銑十郎が餘り光り過ぎた爲めだつた故かも知れぬ。書類の決裁など、ポンポン印を捺すので、

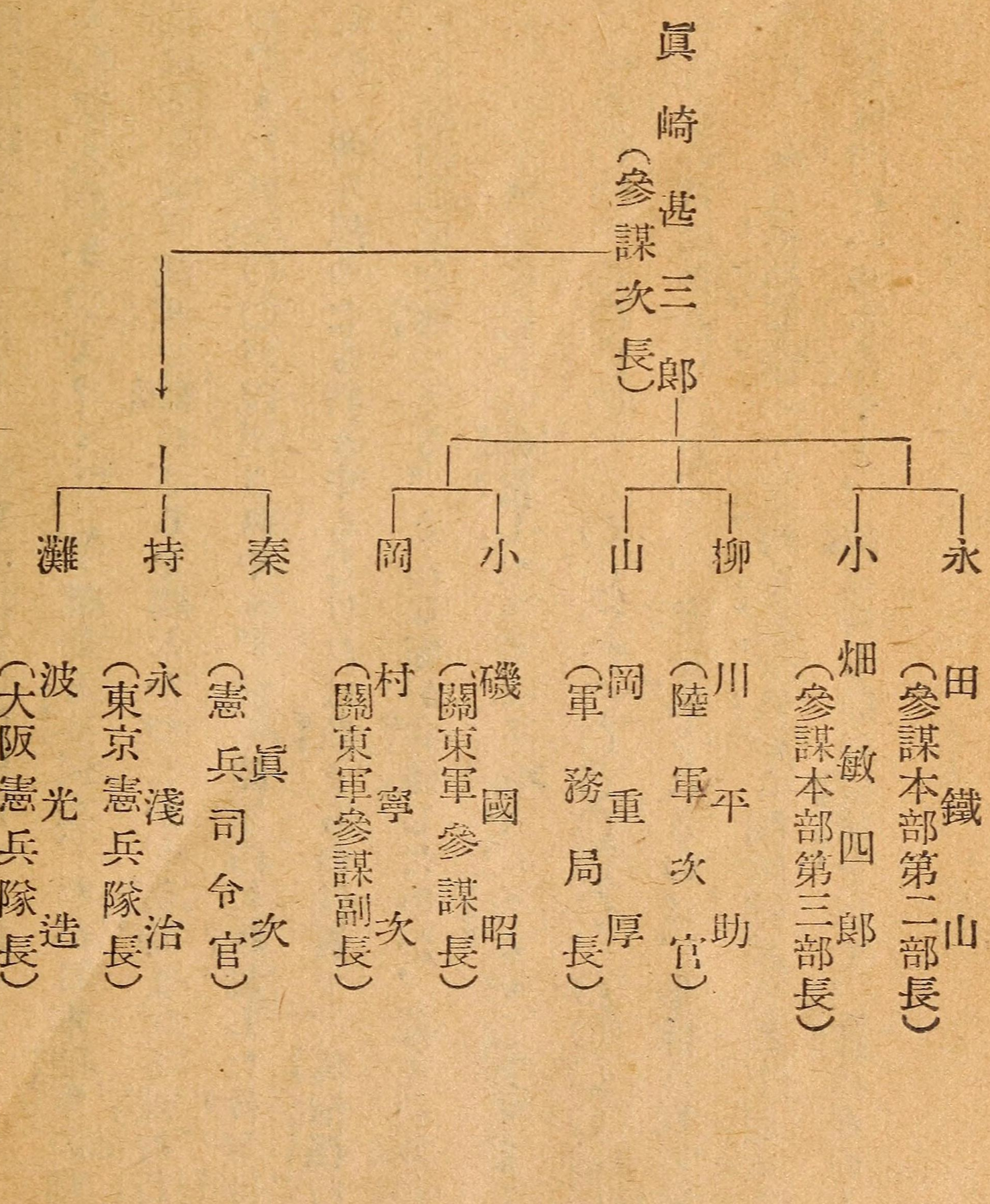
『若しかしたら、めくら判ではないかしら』

と蔭げ口をたゝいてゐると、そうぢやアない。此處は斯う違ふ、この字は斯うが本當ぢやと注意するほどで、部下も彼の頭のいゝのには驚いたものぢや。昔から林前陸相とは仲が良かつた。今でもそうぢや。殊に今度は林の推擧宜しきを得て教育總監になつたのぢやから、彼も相當その知遇に感じてるぢやらう。

産れは愛知縣、三十六年陸軍大學校をトップで卒へ、山縣元帥の副官などをやつて、歩兵第二

旅團長、同第十九旅團長、參謀本部第四部長、陸軍大學校長、第七師團(旭川)長、航空本部長、臺灣軍司令官を經て再び航空本部長となり、軍事參議官の閑職から今度の出世ぢや。

『眞崎大將とはどんな人物かつて？……』眞崎も亦現在、わが日本陸軍の爲に無くてはならん人物ぢや。今度は不幸教育總監を離れざるを得なかつたが、何時までも沈む行路のみは採るまい。いつの日にか、また眞崎○○が現出されやう。往年陸軍内に雄舞した佐賀閥の流れを汲み、性格は唐竹破りぢや。斯う思つたら斯うやらなければ收まらぬ性質で、直情徑行なところが荒木に負けず少壯士官の絶對信望を握つとる。そんな點が共通したのか、荒木の取捲と眞崎の取捲は同じぢや。たゞの、彼が教育總監から轉落したと言ふ一事で、今次の陸軍空前の不祥事○○○



この中で、永田は亡くなり、秦、難波は今八月に待命となつたが、その他は未だ健在な連中ばか

りぢや。小畑は陸軍大學校長に、柳川は第一師團長に、山岡は整備局長に、小磯は第五師團長に岡村は參謀本部第二部長に、持永は朝鮮軍憲兵司令官になつとる。

彼は荒木、阿部(信行)と共に陸軍大學校同期(四十年)で、共に軍刀組ぢや。歩兵第四十六聯隊附として日露戰爭に參戰し、教育總監部第二課長を經て軍事課長になつた。由來軍事課長は陸軍での登龍門とされてゐる。茲を潛り拔ければ、大抵次官、大臣は間違ひないとされてゐる。それから近衛歩兵第一聯隊長、士官學校長、第八師團(弘前)長、第一師團(東京)長、臺灣軍司令官、參謀次長から、荒木退き、林陸相になるに及んでその跡の教育總監となつたといふ經歷を有つとる人物ぢや。

『本庄大將とは?……』滿洲事變で勇名を轟かした鬼將軍ぢや。古いずつと前、大佐か中佐時代だつたが、彼はその頃いまは亡き北支の張作霖の軍事顧問をやつてゐたことがあつた。恐らくその愛兒學良などの爲に、軍書を說いたことであらうが、滿洲事變起るに及んで、彼はその昔の絆を斷つて學良討戰の軍を統したと言ふ奇しき宿緣につながれてゐる。

温厚であり君士風な性格は、侍從武官長として申し分あるまい。大將中で林と共に相似た性狀

を有つてゐるが、容貌は相似ざるものがある。荒木とは肝膽相照らす仲ぢやと聞く。

京都府の出身で、日露戰爭には歩兵第二十聯隊中隊長として出陣し、陸軍大學校を卒へると先づ參謀本部附から陸軍大學校兵學教官を經て、歩兵第十一聯隊長、歩兵第四旅團長、支那公使館附武官、第十師團(姫路)長、關東軍司令官、軍略、軍事畑を眞一文字に足跡し自らが抱く人格に然らしめられて侍從武官長の榮職を捷ち得たのぢや。

『阿部大將について……』彼は運の好い男ぢや。しかし、何時も棚にはぼたもちが有るとは定つて居らんと見えて、茲一二年の彼の淋しさは哀れぢや。世が世であれば、林退却の跡を襲ふて、何の變哲もなう大臣たるの榮冠を得るであらうに、宇垣〇の衰退に比例して、陸軍切つての軍政家阿部信行も、と角〇〇され勝ちぢや喃。

彼の絶頂は、なんと言つても昭和五、六年時代ぢや。濱口内閣のとき、御大宇垣大臣がとなつて、彼はその許で次官を勤めてゐたが、宇垣は耳が惡うなつて、途中で一時職を離れなければならなかつた。その間彼は、陸軍大臣代理として國務を鞅掌したものぢや。親分の病氣で出世したのは、近い陸軍で彼ぐらいのものぢや喃ハハハ……。その故でもあるまいが、部内でも彼は相當

反感を有たれてゐる。師表たらんとすれば、と角風に當るの例ぢや。無理もない。しかし、御本尊や、彼の取巻き連にして見れば、一度は代理拔きの大臣になつて見たいし、して見たいであらう。花咲く春の時節を待たねば致し方もあるまい喃。

生れか。生れは石川縣ぢや。明治八年の出誕で眞崎と同期の軍刀組として陸軍大學を卒業し、獨逸、墺太利駐在の後、陸軍大學兵學教官、野砲兵第三聯隊長、陸軍大學幹事、參謀本部總務部長軍務局長、次官とロクに旅團長も師團長もやらずに其大半を中央部にゐて暮した男ぢや。途もトン〳〵拍子ぢやし、吾輩が彼を以て運の好い男と言ふのは、ここの處ぢや。〇〇〇から相當眼をつけられてゐるが、彼も大將ぢや、いま退いても恨事はあるまい喃。だが反對あれば贊成ありで、味方も決して尠うない。大體、人間が上手に出來てゐる。交際がうまくて、當りが良いとは專らの評判ぢや。宇垣〇〇〇では筆頭大將の南が、間もなく現役を離れなければならぬ、そうなると、彼はたつた一人となる、彼は相當骨が折れやう。

『林大將、荒木大將（別稿）』

『川島新陸相についてか？……』出來た人物ぢや。昔から眞崎と仲が好いと噂されてゐた

が、それでゐて宇垣などにも相當可愛がられてゐるし、だから今度のやうな多難多岐な陸軍の危局を背負ふて起つには好適ぢや。林の跡を襲ふと言ふことについて、彼は教育總監部本部長から朝鮮軍司令官になつたときも、前任は林ぢやつたと言ふ林の後を逐ふ因縁がある。だが、今度のやうな林の不幸だけは逐はんでゐて貰ひたいものぢや。由來川島の第十期には人物が輩出しとるトップを切つてゐた松木直亮は今退いて現役にはないが大將に陞んだ。尤も、これは荒木大臣の涙の名譽進級の大將だつたが喃。うん、そう言へば松木の名譽進級は將來に禍根を殘すものとして當時批難もあつたやうぢやつた喃。松木の次が川島であり、川島の次には是から述べる西義一植田謙吉の兩大將がつづいてゐると言ふ華々しさぢや。

愛媛縣の出身ぢや。四十一年に軍刀を頂いて陸軍大學を卒業した。歩兵第七聯隊長、教育總監部第二課長、同第一課長、歩兵第一旅團長、人事局長、第十九師團長、教育總監部本部長、朝鮮軍司令官、軍事參議官となり今日を迎へた。

『西大將とは？……』本庄が侍從武官長になる前、彼も噂の人となつた。その過去に侍從武官として長い間在つた故にだらう喃。福島縣の出身で、川島陸相と共に第十期の秀逸ぢや。野戰

砲兵射擊學校教官、野戰重砲兵第三旅團長、技術本部總務部長、野戰砲兵學校長、第八師團（弘前）長となつて滿洲事變に際會し、その主動部隊を指揮して赫々たる武勳を樹てたことは餘りにも有名ぢや。

『植田大將とは？……』

滋賀縣の生れぢや。俗に言ふ近江商人とやらで、彼も若い時分は商を以て身を立てやうとしたものぢや。東京高等商業學校に入學したが、何を思ひ何に感じたか、中途にして初志を翻し軍人になつたと言ふエピソードを有つとる。明治八年の生れで陸軍大學を四十二年に卒へた。騎兵第九聯隊附から、第十六師團參謀、騎兵第三旅團長、軍馬補充部本部長支那駐屯軍司令官、第九師團（金澤）長となり、上海事變に出征し、不幸不逞鮮人に爆彈を投下され、重傷した。當り前なら第十期の最左翼の故を以て中將停りであつたが、上海での重傷が氣の毒がられ、朝鮮軍司令官に就くと間もなく大將に進級した。性格は極めて温厚、あの澁味の顏に似合ず、寧ろ女性的な性格を有つとる。

（完）

昭和十年九月十五日印　刷
昭和十年九月二十日初版發行
昭和十年九月二十日再版發行
昭和十年九月二十一日三版發行
昭和十年九月二十三日四版發行
昭和十年九月二十四日五版發行
昭和十年九月二十五日六版發行
昭和十年九月二十六日七版發行
昭和十年九月二十七日八版發行

不許復製

「永田事件の眞相」奥附
定價十錢

著作者　東京市麹町區飯田町一ノ二三　をゝしま・ひろし
發行者　東京市豐島區西巢鴨町二ノ二一八〇　西川康
印刷者　東京市赤坂區青山北町一ノ四　猪平正
印刷所　東京市赤坂區青山北町一ノ四　正文綱堂
發行所　東京市京橋區銀座三丁目三番地銀座ビルヂング　時事研究會
電話　京橋（五六七）八番　（一二一）八番
振替口座東京一二九四一番
發賣所　東京市麹町區有樂町二ノ二　森田書房
電話　銀座（四七一〇）番　（四八二四）番

LIBRARY OF CONGRESS
0 020 208 392 4

發行　時事研究會

Nagata Jiken no shinsō
880-01 Ōshima, Hiroshi
5330408
Library of Congress, Asian Division
[37] nagatajikennoshi008800
00202083924
Jan 03, 2014